

研究シンポジウム：自身の成長のために 有用なフィードバックをどう誘起するのか

Research Symposium: How to Induce Useful Feedback for Our Own Growth

合田美子* 石毛弓** 山本佐江*** 可部繁三郎**** 田中洋一*****
Yoshiko Goda * Yumi Ishige ** Sae Yamamoto***
Shigesaburo Kabe**** Yoichi Tanaka*****

*熊本大学 **大手前大学 ***育英大学 ****福井工業大学 *****仁愛女子短期大学
*Kumamoto University **Otemae University ***Ikuei University
****Fukui University of Technology ***** Jin-ai Women's College

＜あらまし＞ 本シンポジウムでは、教育・学習におけるフィードバック(FB)の重要性を共有し、学習成果を向上させるための有効な FB を誘起するメカニズムについての対話を促進することを目指す。良質な FB を求めることは自己成長のための学びに必須である。これまでの研究成果をもとに、FB の授受プロセスの概要、高等教育における事例、より良い FB を受けるためのレディネス、フィードバックへの反応を記録し FB の活用を支援するシステムを紹介する。シンポジウムを通じて、参加者との交流を図りながら自身の成長を促す FB をどう誘起できるか、FB シーカーに何が必要かを検討する。

＜キーワード＞ フィードバック、フィードバックシーカー、生涯学習スキル

1. はじめに

社会に適応し、人生を豊かに過ごすために生涯を通じて学ぶことが推奨されている。自己成長を促すためには主体的に自律的に学ぶことが重要である。個人での学習に加え、社会的な学習の場で、自己のやっていることにに対し客観的に多様な視点からフィードバック(FB)を受けることで、新たな気づきやアイデアに繋がり、発展や改善の機会になる。

従来の研究では、適切な FB の提供方法など、提供する側に焦点化したものが多かった。本研究は、FB 受容(シーカー)側にフォーカスしてきた。発表時の対話や尺度により収集した回答などを、データ駆動とナレッジ駆動アプローチを用い研究を進めてきた。本シンポジウムでは、研究成果として、どのような働きかけにより、良質な FB をもらうことができるか、もらった FB を有効に活用できるかを、会場の参加者と共に考えたい。

発表は、主旨説明からはじめ、FB 授受プロセス、FB 活用支援事例、レディネス、支援システム開発について紹介する。以下に発表の概要を整理する。

2. FB の質と授受プロセスの概要(合田)

本研究では、良質な FB の誘起が主題となっており、FB の質を判断するための基準が

必要であった。そのため、FB の質を構成する要因を体系化し、質をチェックするためのリスト案を開発した。大項目として、コメント自体、コメントの特性、コメントの内容、シーカーの成長を含む。冒頭で、良質な FB について操作的定義を説明する。

次に、FB 受容プロセスを紹介する。社会的な学習の機会として、研究会やゼミにおいて、発表者(FB シーカー)1 名に対し、他の参加者(複数の FB 提供者)がいる場面を対象とし、FB 授受のプロセスを整理した。グループやコミュニティにおける活動目的の共有、心理的安全性、発表者の準備状況、参加者の役割や意識などの要因を踏まえ、各発言の相互作用を考慮し、プロセスを時系列にまとめた。

3. FB について知ることの意義：高等教育における事例(石毛・山本)

良質な FB を求めるためには、FB とは何か、その意義、活用方法など、FB についての知識(Ishige, et al, 2021)が必要であると考ええる。そこで、FB について学ぶ機会を提供することの影響や仕組みづくりについて2つの事例を通し検討する(石毛ほか、2022; 山本、2021)。事例1(石毛)では、学習支援者(チューター)への影響を、事例2(山本)では、効果的な FB シーカーになりそうな学生の特

徴について実践研究の結果を紹介する。良質なFBを誘起することに加え、そのFBを有効活用することが、自己成長には欠かせない。事例では、どのように学生を効果的なFBシーカーに育成していくかのアプローチや支援方法について検討する。

4. FB誘起のためのレディネス (可部・田中)

有用なFBをもらうためには、FBシーカーによる発表準備、FBに対する態度、特性など多くの変数が影響する(可部ほか, 2021)。例えば、図1のように、FBシーカーのFBに対する受容感度の大小により、得られるFBも異なると考えられる。本発表では、関連する変数を整理し試作した数理モデル案を紹介する。モデル案の開発プロセス、および、独立変数、従属変数などの各変数の意味、数値化の方法、解釈を説明し、良質なFBを誘起するためのレディネスについて議論する。

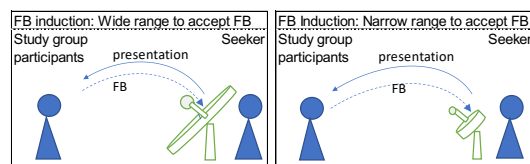


図 1 FB 受容の感度による違い

5. FB 支援システムの開発 (合田)

FB 誘起および FB の活用を促すために、FB 支援システムを開発した。グループやコミュニティでは、発表者(FB シーカー)と参加者(FB 提供者)の対話が、他の参加者(FB 提供者)の思考や発言に影響を与えることがある。これらのやり取りを可視化し、発表者を含む参加者がそれぞれの発言についてどのように感じているのかを、リアルタイムで記録し共有することで、人に影響を与えた発言や分かりづらかった発言などが把握できる機能を実装した(図 2, 図 3 参照)。

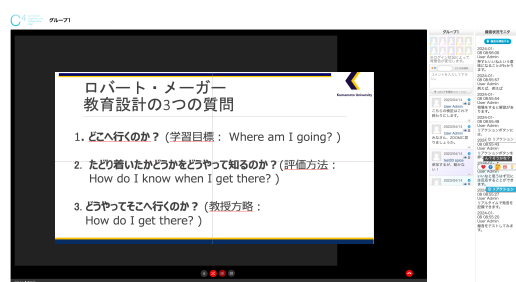


図2 システム画面1：発表者の共有画面，グループチャット，リアルタイム発言

COURSE_NAME	CHAT_NAME	GROUP_NAME	USER_NAME	KEYWORD
詳しくてください	詳しくてください	詳しくてください		
田	ユーザー名			メッセージ
5370	User Admin	おすといいわいという意になることができます。		
5369	User Admin	例え、例え		
5368	User Admin	相場をするし解説があります。		
5367	User Admin	リアクションボタンには、		
5366	User Admin	リアクションボタンを押します。		
5365	User Admin	いろいろボタンはすでに見つけることができます。		

図3 システム画面2：リアルタイムの発言と反応の記録

これにより対話におけるFBの質を向上させ、FBシーカーが受け取ったFBの活用を促進することが可能となる。また、本システムを活用することで、対話における相互作用やダイナミクスを描写することも可能になり、FB誘起モデルの更なる検証と改善に繋げることができる。

6. 研究シンポジウム参加者へのお願い

我々は、FBの研究を行っており、FBの重要性を主張している。そこで、本研究を一層発展させるために、参加者の皆様からFBをいただきたいと考える。発表の合間には、参加者との意見交換の時間を予定している。また多くのFBをいただけるようオンラインでの共有ドキュメントも用意する。ご協力を仰ぎたい。

謝辭

本研究は JSPS 科研費 JP 20H01727 の助成を受けたものです.

参考文献

- Ishige, Y., Goda, Y., & Yamamoto, S. (2021) Classification and Effective Utilization of Feedback. The IAFOR International Conference on Education
- 石毛弓, 合田美子, 山本佐江. (2022) フィードバックを活用する仕組みづくり, 大学教育学会第 44 回大会
- 山本佐江 (2021) 主体的・対話的で深い学びに役立つフィードバック概念の考察-高等教育からの示唆-, 帝京平成大学児童学科研究論集, 11: 15-22
- 可部繁三郎, 田中洋一, 山田政寛, 石毛弓, 山本佐江, 合田美子 (2021) フィードバック誘起モデルの開発: 量的アプローチによる推計式の試作. 教育システム情報学会 (JSiSE) 2021 年度 特集論文研究会, 36(2): 23-28